# 海外で活躍する指導者 53

「海外で活躍する指導者」、53回目はモンゴルで活躍する壱岐洋治氏からの報告です。

## プロフィール

### 壱岐 洋治（いき ようじ）

**1949年9月13日生まれ／宮城県出身**

小学校の恩師の影響を受けてサッカーの道へ。東北学院中学校・高校、そして日本体育大学（大学4年次は主将）でプレー。卒業後、母校に赴任するとともに、宮城教員クラブで活躍する傍ら、東北学院高校の監督、総監督を36年間務める。大学進学がほぼ全員の進学校にあって、全国高校総体（インターハイ）、全国高校サッカー選手権大会に10数回出場、Jリーグの選手も5人輩出。また、東北サッカー協会、宮城県サッカー協会の技術委員長を4年間歴任した。2016年2月からモンゴルに派遣され、U-14女子代表監督、U-17女子代表監督として活動中。2005年にJFA公認A級コーチライセンスを取得。

## 派遣国・地域の紹介

### モンゴル国

（出典：外務省ホームページ）

東アジア北部に位置する。首都はウランバートル。面積は156万4,100㎢（日本の約4倍）で、人口は311万9,935人（2016年、モンゴル国家統計庁）。民族はモンゴル人（全体の95%）およびカザフ人などで、言語はモンゴル語（国家公用語）、カザフ語。宗教はチベット仏教など（社会主義時代は衰退していたが、民主化（1990年）以降に復活。1992年2月の新憲法は信教の自由を保障）（以上、外務省ホームページを参考）。

FIFAランキング：198位（2017年7月6日発表時点）

### これまでの活動について

モンゴルの総人口は約300万人（日本の約40分の1弱）で、そのうちの半数が首都のウランバートルに居住。よってサッカー人口も極めて少ないです。その中で、女子は地方都市で活動している選手もいますが、大多数はウランバートルに集中しています。従って、選抜練習は「通い練習」が可能なため、逆にやりやすいと言えます。

昨年は14歳前後の選手を週5回、モンゴルサッカー連盟内のサッカー場、フットサル場、体育館で指導していました。赴任2年目の2017年は、来年開催されるアジアサッカー連盟（AFC）の予選を目標に、U-14、U-17のカテゴリーに分けて練習を実施しています。

### 国際試合初参加、そして初勝利！

東アジアサッカー連盟（EAFF）が主催する「EAFF U-15ガールズトーナメント2017」が4月15日から中国・上海で開催されました。同大会には9チームが参加。われわれは大会参加にあたり、下記の目標を掲げ、3月下旬から4月上旬にかけて非常に厳しいハードな合宿を実施しました。

**【目標】**

①基本技術のさらなるレベルアップ
②的確な状況判断
③1試合動けるスタミナの向上
④攻守における1対1の強化

日本では厳しい合宿は当たり前ですが、彼女たちは慣れていないこともあり、非常に苦痛だったようです。しかしながら、このハードな合宿を乗り切ることによりチームとしての団結が生まれました。

大会は参加チームのレベルに応じて、上位リーグ（日本、朝鮮民主主義人民共和国、韓国、中国）と下位リーグに分けて試合が組まれました。モンゴルは第1戦で香港、第2戦でグアム、最終戦で北マリアナ諸島と対戦しました。香港には敗れたものの、グアムとは1-1の引き分け。北マリアナ諸島とは2-0で、待望の初勝利を挙げることができました。

最終戦は総合力が互角と読んでいましたが、守備の中心選手をMFに上げ、勝利のためにあえて攻撃的サッカーを確認し合い、試合に臨みました。守備面においても全員が意識を高く持ち、無失点で終えることができました。最終的にはシュート力のある2人がそれぞれゴールを決め、勝利を得ることができました。EAFFの会議のために中国を訪れていたガンバートル会長も応援に駆けつけ、モンゴル女子サッカーの初勝利を共に祝ってもらうことができました。会長からの感謝の抱擁、握手、そして何よりも彼女たちが試合終了後にベンチに戻ったときのうれし涙に、年甲斐もなく目頭の熱くなる思いでした。以下に、主力として活躍した3選手のコメントを抜粋、列挙します。

MF ツォロモン（14歳）

大会参加にあたって、合宿でチームの弱点克服に努めました。グアム戦では初ゴールを決めることができました。また、最終戦の勝利の後、涙が自然と流れ、言葉にならないほどうれしかった。今回は他チームの選手とも友達になったり、すばらしい体験になりました。

中国で開催されたEAFF U-15ガールズトーナメント2017で初勝利

FW マラガ（14歳）

サッカーは、人生において大切なこと、団結力、友情、責任感、我慢する力など、いろいろと教えてくれる最高のスポーツだと思いました。監督からチームワークの大切さ、周囲をよく観て、自分で正確な判断をするようにと言われ続けましたが、少しずつ成長していると実感しています。また、朝鮮民主主義人民共和国、日本のチームを見て大変勉強になりました。

DF ローラ（15歳）

最終戦、監督の指示でセンターDFからMFに上がり、攻撃的なサッカーをやるという作戦によりゴールを目指して積極的に頑張りました。結果的にゴールを挙げることもでき、初勝利につながりました。11人が一つの目標に向かって協力しなければならないサッカーのすばらしさを思い知らされました。

### 課題

帰国後、彼女たちは初勝利の自信を胸に、積極的、意欲的に週4回のトレーニングに励んでいます。

モンゴルでは過去の日本と同様、依然として高圧的で強制的な練習がまだまだ残っています。強化策として大事な「厳しく鍛えること」は必然ですが、自ら考え、意欲的に、かつ興味を抱きながら練習に取り組む姿勢はより大切だと考えています。幸いにモンゴル連盟がアシスタントコーチを2名配属してくれました。今後はこのコーチと協働しながら、モンゴル人の特性を生かしながらJapan's Wayの良さを伝授し、女子サッカーの普及、発展に寄与したいと思います。

さらに、モンゴルサッカー界の今後の発展のためには、協会の組織力向上、トップリーグの充実、育成年代の指導強化、指導者養成制度の確立などが必要不可欠です。この問題点にいかに貢献するかを日々模索している状態です。

**「アジアのピッチから」～JFA公認海外派遣指導者通信～**
http://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/from_pitches_in_asia/

モンゴルで活動する壱岐氏（中央）

モンゴルでのトレーニングの様子（1月下旬／-20℃）